

会報
獅子の如く
ししのごとく

2020年8月25日
第30号 地域版
発行
獅子の如く編集部

発行責任者 木村 信彦
編集者 石田 房一

吉祥院六齋念仏

国の重要無形民俗文化財指定

空也踊躍念仏

六齋念仏踊りが京都でいつ頃から行われたかは明らかではありませんが、持統天皇（六四五年〜七〇三年）に行われていたことが日本書記にもみられます。

※言継卿記（二五七七年）によれば、すでに六齋のような団



演目：獅子（演者／木村信彦、村田大輔）

※言継卿記とくまよきは戦国時代の公家。

六齋の花形と言われる「獅子」。木村信彦氏（獅子の如く会長）と村田大輔氏（同副会長）は、獅子に対する思い入れは誰にも負けない情熱と誇りを持っていて。二人は五十年から獅子を演じて約三十年が経つ。

獅子の前を担当する大輔氏は小柄だが足腰が強く八十キロ、信彦氏は腕力があり、力強さ、しなやかさ、動きの速さ全てにおいて卓越し、観客を魅了する。中でも碁盤に上がり、躍動感のある演

獅子への熱き思い



京都の六齋念仏

六齋日

空也上人信仰広める

おり、一九二一年に行われた空也上人九

この観念は、上人が一般庶民に広める

五〇年大遠忌などにも参加しています。また、空也堂が発行



六齋念仏踊りの集団は、「干菜寺」と「空也堂」系に分けられ、吉祥院六齋保存会は、空也堂系に属し、芸能六齋として空也堂から鑑札や免許状をもらって

「獅子の如く」地域限定版

当研究会が発行している会報「獅子の如く」は吉祥院天満宮大祭（4/25、8/25）に天満宮境内で配布しておりますが、このたび、令和2年8月より、地域限定版として発行することになりました。吉祥院六齋念仏の歴史や魅力について地元の皆さんに知って頂くことを目的としています。また、特集企画『まつりの思い出』を題としたコラムの掲載を来年度4月号から予定しております。これは地域の伝統文化を通じて、地域コミュニティをより深めていただくことを目的とした企画です。



獅子写真左：下が大輔氏、写真右：下が信彦氏（講演活動：伏見呉竹文化センター）

した「六齋念仏巡行之証」と記された木札も残っています。その保存と継承に努力していくため、一九七七年には、保存団体が構成する『京都六齋念仏保存団体連合会』が結成され、一九八三年には、国の重要無形民俗文化財に指定され、民俗芸能として高い評価を受けています。このような流れをくみ、吉祥院六齋保存会は、能や狂言、歌舞伎から流行芸を摂取しつつ、独自の芸能を開いた芸能六齋として伝承されています。

四月二十五日に春季大祭、八月二十五日に夏季大祭が行われ、両日共に夜八時頃から境内の舞殿で六齋念仏が奉納されます。笛、鉦、太鼓が奏でるお囃子は訥々として涼しげで、見上げる観衆のざわめきの中に溶け込んだかと思うと、ふっと浮き立ってくる、飄々として味わい深い地域芸能です。





○印 托鉢 (たくはつ)

奉納が行われる吉祥院天満宮は、菅原道真生誕の地に建てられ、道真を

六齋念仏の起りは、千年前、京洛に疫病が流行り、多くの死者が出て人々は不安に陥り、空也上人

吉祥院六齋念仏踊り

きつしょういんろくさいねんぶつおどり

が修行に用いる托鉢を叩きながら念仏を唱え、人々の不安を取り除いたという。空也上人が信仰を広めるため、托鉢から鉦太鼓に変え、叩き、踊りながら念仏を唱えたのが起りとして、その後、六齋日に

行われるようになったため「六齋念仏」と呼ばれるようになり、これがさらに室町時代中頃から娯楽的な要素を採り入れて、徐々に今日見られるような芸能色豊かな形へと変容してきた。

現在、京都市内の数ヶ所に伝承され、一括して「六齋念仏」と呼ばれる。しかし、南条は、六齋念仏の伝承・奉納から排除されていた。厳しい時代を乗り越えてきただけに、自分たちも六齋の担い手になりたいとの思いは、南条の人々にとって切

祭神とする天満宮としては、全国に数ある中、最初に創建された。吉祥院六齋念仏は、現在、保存会によって伝承されている。吉祥院地域には、東条・西条・南条・北条・新田・石原・嶋で六齋の姫を競っていた。しかし、南条は、六齋念仏の伝承・奉納から排除されていた。厳しい時代を乗り越えてきただけに、自分たちも六齋の担い手になりたいとの思いは、南条の人々にとって切



吉祥院六齋念仏踊り：演目（獅子舞）

実なものだったに違いない。南条での六齋念仏は、地主が他地区から小作に来ていた人に

対し、小作料の減免と引き換えに六齋を教えてほしいと願い出たことから始まる。南条（菅原組）が吉祥院の六齋組の一つに数えられるようになったのは、明治初年頃のことである。「吉祥院天満宮の舞台に上れない」「六齋奉納が許されない」

厳しい時代を乗り越えてきました。研究会は現在、小学生時代から吉祥院子ども六齋会で活動してきた高・大学生と吉祥院六齋保存会の若手会員を中心に活動しています。

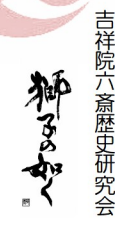
研究会は現在、小学生時代から吉祥院子ども六齋会で活動してきた高・大学生と吉祥院六齋保存会の若手会員を中心に活動しています。

吉祥院六齋歴史研究会（獅子の如く）は、六齋の歴史研究を通して、吉祥院六齋念仏踊りの後継者育成と発展を目的に二〇一〇（平成二十二年）四月一日に発足しました。

獅子の如く

主な活動内容は、現在に至る歴史をまとめた会報「獅子の如く」を発行する他、吉祥院天満宮（四月）収集、六齋の歴史の「語り部」に養成し、学校や企業などで講演活動に取り組みんでいます。

二十五日、八月二十五日（の六齋奉納に合わせ、来場者に配るほか、六齋に関する聞き取り調査や資料、道具、写真等の



心が合わせて一途に六

ながらも、南条の人々は決して怯まず弛まず、六齋の技の上達へ精進を重ねてきた。一方、日本の地域行事や伝統文化、祭事が衰微・消滅を余儀なくされる歳

弱体化を迫る時代の波に抗い、差別を撥ね退けることができたのである。

吉祥院六齋保存会の高齢化や担い手育成の問題などで存続の危機に瀕していることから、各種地域団体と連携し、研究

吉祥院六齋保存会

かつて排除された人々が吉祥院六齋保存会を結成した。

戦後幾年かが経ち、気がつけば、吉祥院六齋念仏踊りを受け継ぐのは南条（菅原組）だけになった。

さらには、吉祥院子ども六齋会は、保存会、研究会の指導のもと吉祥院六齋念仏踊りを次世代へ伝える取り組みが続けられている。

現在は、吉祥院支部をはじめ、地域の各種団体が貴重な地域文化財である吉祥院六齋念仏踊りの守る活動が広まっています。

獅子の如く 【編集部】